

# おおいた 法の海

第 46 号

発行所

浄土真宗本願寺派

大分教区基幹運動推進委員会

〒874-0920 別府市北浜3丁目6-36

本願寺別府別院内

TEL 0977-22-0146

FAX 0977-24-7831



本山御影堂（仮屋根が取れて 新しく・・・）

## 吠えている私

先日、月参りでご門徒さんのところへお参りに行ったときのことです。

そのご門徒さんの家では犬を飼っていて、私が月毎にお参りに行くたびに吠えていました。ところが、その時は全く吠えずに私を見ていました。

お参りが終わってからそのことをご門徒さんに言うと、その方は犬のところへ行って「今日はよく吠えなかったねえ、おりこうさん」とその犬をほめていました。

その姿を見て、私たちは一日一日生きていく中で、何事もなく穏やかで過ごせた事があっただろうか。意識のあるないにかかわらず、事あることにあの犬のように、人だったり物だったり何かしらかのものに「吠えて」しまっている日常ではないでしょうか。

阿弥陀さまはその「吠えている私」を、吠えている私そのままに必ず救います。と

喚びかけていてくださいます。そして、もうすでに阿弥陀さまのお救いの中にあるのです。

そのことに気付かされたなら、おのずから「吠えなくてもいい私」へと阿弥陀さまにお任せして一日一日を過ごさせていけるのではなからうかと、この事を通じて味わわせていただいたことです。

（耶馬溪組教円寺住職 佐藤 哲英）

某月某日、某寺にて。

★ ★

A子 御院家さん、人間死んだらどこへ行くんでしょうか。草場の蔭とか、黄泉の国とか、天国とか、冥土とか、いろいろ聞くとくけれども、よくわからないのですが……。

### 草場の蔭

住職 せっかくだから一つ一つ確かめてみましょうか。

お葬式の葬の字を見ると、草の上に死体を置いてその上にまた草が生えるような字になっているから、草場の蔭は自然に帰るイメージ、お墓のイメージでしょうね。

A子 「千の風になつて」の歌詞に「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私は居ません」とありました。

住職 故人はお墓で亡くなったわけでもないし、故人がお墓にじっと留まっているとは考えにくいですね。

A子 雨ざらしで冷たそうでもあるし、お骨にくっついて移動

すると思つたら納骨できなくなりそうですね。

### 黄泉の客

住職 では黄泉の国とはどんなところでしょうか。

A子 日本の国産み神話で、イ

## ペンペン草の境内地 ②0いのちの行方



に海水で禊すすぎをしたところから、清め塩の風習が生まれたという説もあります。  
A子 ウジが湧いて腐る所には行きたくないですね。

### 天国はどんな世界

ザナギのミコトが、亡くなったイザナミのミコトを追いかけていった所ですね。

住職 そうそう。やっこのことで捜しあてたら、腐ってウジが湧いて見られない姿になってい

た。怖くなって一目散に逃げ帰り、死のケガレが移らないよう

A子 天国はどうでしょう。

住職 一口に天国と言っても、キリスト教やイスラム教などの

一神教の天国と、東洋の天の世界の二通りあります。

A子 私は仏教徒だから、一神教の天国には行けそうもないですね。

住職 生きている間に洗礼を受けて、一生涯戒律を守り通すことのできる人しか行けない世界だろうと思います。

A子 みんなが行ける世界ではなさそうですね。東洋の天の世界はどんなところでしょうか。

住職 六道輪廻して聞いた事がありますか。私たちは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六つの迷いの境涯を経巡めぐっていて、そこから解脱けだつすることが仏教の目的です。

A子 あれ、天の世界も迷いの世界ですか。

住職 インドの神話では梵天と帝釈天が戦争していますし、日本の神話では天照大神がすねて天の岩戸に閉じこもります。

A子 決して覚った人や救われた人の世界ではなさそうですね。

住職 有り難い事に、私たちのいのちの行く末は、阿弥陀如来の極楽浄土と教えていただいています。冷たい所や寒い所、暗

い所(冥土)、ウジが湧いたり腐ったりする所ではなく、光り輝く仏様の世界に迎えていただく教えを聞いて、安心して生き、安心して死んでいけるのが浄土真宗です。

## 揭示伝道

### 簡易法語揭示板

【大野組 了因寺】



揭示板は、若院家さんの担当で、友達と二人で手作りされたそうです。

その時期にあつた言葉や、他寺の揭示板の心に響いた言葉など、御院家さんが書かれたり、パソコンから文字を引用されているそうです。

近くに、病院や道の駅があり、散策される方が立ち止まって見られるそうです。

揭示板の数を増やしていきたいとおっしゃっていました。

# 日常の中の仏教(3)

東 光 爾 英



## 【落慶のことばと 阿弥陀さま中心の 暮らし】

先日、近くのお寺で、本堂が改修され完成したお祝いのご法要がありました。  
美しい花が飾られ、すてきな雅楽が流れ、たくさんのご院家さんや、子どものお稚児さん達が行列をして、すばらしいご法要でした。

こうした、本堂などの建物ができあがったお祝いのご法要は、「落慶」法要といわれます。しかし、お祝いなのに、どうして「落」、落ちるといふ漢字が使われているのでしょうか。  
実は、この「落」といふ漢字をよく見てみると、「草かんむり」と「さんずい」と「各」か

らできています。これは、家の草ぶきの屋根から、雨水がしたり落ちるようすを形にあらわした漢字なのです。

ですから、「おちる」という意味の他に「やしき」「たても」の「意味があり、「集落」「村落」というときに使われる「落」がこれで、「落慶」の場合も「たても」をあらわすということになります。

「慶」は「よろこび」の意味です。ですから、たてもができあがったよろこび、お祝いの行事であるということが、この漢字から

わかんと思えます。

しかし、お寺の本堂は、普通の家屋とちがいで、私たちが住むためでもなく、集会所でもありません。そうです阿弥陀如来さまが中心ですね。阿弥陀如来さまのみ名、南無阿弥陀仏というお念仏のみ教えを聞かせていただき、心の安らぎをいただいでゆく場所がお寺の本堂です。

また、本堂に入ると、畳がしいてある所とは別に一段高くなっている板張りの所があります。ここを内陣といいますが、美しいお花が飾られ、輝くばかりに口ウソクの灯明もともされ、かわしいお香のかおりにつつまれ、阿弥陀如来さまが中央におられます。

これらはすべて、阿弥陀如来

さまのお悟りの世界である「お浄土」をあらわし、私たちが仏になる大切さを実感できるようなしてあるのです。ですから、お花も灯明もお香も、色のついた衣を身にまとわれた僧侶の方たちも、かわいらしいお稚児さんたちも、みな阿弥陀如来さまを讃えるためにあります。

そして、この本堂のお飾りをそのまま、それぞれのお家につしたものが、皆さんのご家庭のお仏壇です。逆に言えば、ご家庭のお仏壇の本家が完成した慶びであるということになるのです。

わたしたちは、いつも自分中心の暮らしをしておりませんが、こうした慶びのご法要をご縁として、阿弥陀如来さま中心の暮らしを考えてみてはいかがでしょう

うか。

「私の家には阿弥陀さんがあ」ではなく「私は阿弥陀さまのおそばで寝起きさせていただいてい」と味わっていただいたいですね。「落」といふ漢字には、最後にもう一つ意味があつて、それは「始まり」という意味があるのです。

これを読まれている今このときから、どうぞ皆さん、阿弥陀さまを中心とした、そしてお寺を中心としたお念仏かおる日暮らしを「始めて」いただきたいとおもいます。きつと新しい目をもつことができますよ。



### 浄土真宗の生活信条

- 一、み佛の誓いを信じ、尊いみ名となえつつ強く明るく生き抜きます。
- 一、み佛の光りをあおぎ、常にわが身をかえりみて感謝のうちに励みます。
- 一、み佛の教えにしたがい、正しい道を聞きわけてまことのみのりをひろめます。
- 一、み佛の恵みを喜び、互にうやまい助けあい社会のために盡します。





# ビハラー法話

## 『ビハラー大分 十周年記念をむかえて』

大分ビハラー役員 村上 正典



この度、大分教区の多くの皆様のご支援を頂いて『ビハラー大分』は十周年をむかえることができました。『ビハラー大分』ができました。『ビハラー大分』では十周年をむかえるにあたって、十周年記念事業として三つの事業を掲げました、一つは「ビハラー大分公開講座十周年記念講演会」を大分文化会館でアルフォンス・デーケン氏による心の癒しとユーモアについて、宮崎幸枝氏よりのちより大切なことのお二人のご講演で盛大な講演会を開催いたしました。またビハラー活動の関連資料

(書籍)の整理・編纂事業もしております。そしてビハラー大分十周年記念ハワイ視察旅行(チャプレンに学ぶ)を2月22日から27日まで会員12名でワイルク本願寺やマウイ記念病院、ハワイ別院などを訪ねました。ワイルク本願寺では、開教使の村上先生からハワイのチャプレンの研修内容やビハラー事情について講義をしていただき、たくさん学びを得ることができました。

チャプレン(僧侶及び神父)の仕事は、患者や家族の希望に

添って家庭や病院を訪問し、患者だけでなく、家族に対して心の支えとなる話をする事で、宗教者が見放さず、患者さんは一人で無いことを本人が理解して宗教の中に生きていけるように仏教聖典(聖書)を読んで、心の安らぎを与え、家族と今後大切な事等(死後の事)を話し合い、出来る限りの心の支えをします。

「死」に対しては、人それぞれ理解度が違います。自分の家族の場合、友人の場合、寺の門徒の場合、全く関係の無い人の場合等それぞれありますが、大切なことは、自分の問題として捕える事でありませぬ。(1)死とは何であるのか。(2)悲しみ、悲痛とは何か。(3)失うとは何か。(4)慈愛とは何か。(5)力とは何か。(6)怒りとは何か。(7)自分を制御できないとは何か。(8)見えない

力とは何か。(9)変化とは何か。(10)受入とは何か。(11)理解とは何か。

私達全ての人間は、悲しい経験を通して色々な物事を他人事として受け止めて行くのでなく「自分の事」として考え受け入れていけば、相手の心や気持ちがあつても理解できるのではないのでしょうか。そして、その理解によつて、死という苦しみ悲しみを正しく見ることが出来、心より相手に対して労わりの言葉が頭れるでしょう。そこに宗教者として人間の一番大切な姿を見ることが出来るのではないのでしょうか。

そしてその姿とは、痛み、悲しみをそのまま受け止める事が出来る。共に涙をながせる。痛みや悲しみを通して、現実をありのまま姿で見ることが出来る。痛みや悲しみを解り、痛みや悲しみと共にこの人生を精一杯生きるという勇気がわいてくる。苦悩(体の痛み、心の痛み)を乗り越える勇気が生まれる。

これらの事柄を理解の上、本當の心のケアをすることがビハラー活動であり、われわれ宗教者の使命・姿であろうと学びました。

### あとがき

先月、京都を訪れた。その折『福田平八郎展』を観ることができた。

氏は、明治二十五年大分市王子町に生を受けた。その後京都市立美術工芸学校にて絵を学び、そのまま京都に居住し日本画家として制作に励む一生を送った。八十三年間の人生は昭和四十九年三月、幕を閉じた。

故郷大分と京都を愛した一生は、それぞれの地で「名誉市民」に、国家からは「文化勲章」を、また没後は両地で「市民葬」をもって顕彰された。

氏はある雑誌に、

「画(え)にこそ多少自信はあつても、どだい凡人であることを欣(よろこ)んでいる。ところがうっかりしていると、その凡人が、いつか凡人ばなれして、少しえらそうな気持ちになつてゐることがある」と

と厳しく自分を省みる。

氏の一生を思うと、「生死出づべき道」を求め、厳しく自分を問ひ続けた親鸞聖人のことを想わずにはいられない。

夏が去り、九月になると、いよいよ『本願寺展』―親鸞聖人と仏教伝来の道―(仮)が九州国立博物館にて開催される。九月が待ち遠しい。

# おおいちゃん



